(夕刊 十三日)

磐城新聞

休刊 大祭第一第三日曜
定價 壹枚二錢、壹ケ月五十錢、郵税十錢
廣告料 二行五十錢(指定廿錢増)
發行兼編輯印刷人 遠沼龍輔
發行所 福島縣平町田町拾六 磐城新聞社 電話五六四番

河上法學士の資本論入門について

平　石島長雄

「讀めば讀むほど底の知れぬ偉大な著作といへば經濟學の領域では資本論を措いて外にない。もちろん「經濟學批判」に關する一著作ではあるが——しかも經濟學を最廣の基礎——唯物辨證法的世界觀——に(こゝでもより、それは「吾々を取りまく實在の研究と理解とにとつて、今もなほ底知れぬ泉として役立ちつゝある酌めども竭きぬ知識の寶」となつてゐる。「けだし聖書の辭ゝ勵するや製作天地に參し意匠おのづから陰陽運行し氣象に則つて藻を摘る、太た慨嘆すべし矣—といふもの、直ちに採つてこれを資本論に當てうるであらう」(岩波文庫[三])

これはこれ河上博士等資本論邦譯への序言ある。博士は資本論邦譯を著手されると同時に「資本論入門」を手引となるべき解說書として刊行されたことは周知のことである。私はこの「入門」の内容を簡單に紹介の勞をとりたい。

この書は分冊の形で刊行せられてゐるがその第一分冊に於ては序說として、其の第一頁に資本論は何のために著はされたものかを設問し、そしてマルクス自身の言葉を資本論第一版序文から「近代社會の經濟的運動法則を曝露することはこの著作の最後の窮極目的である」と引用しこの一句の明なる解釋をなし、次いでコペルニクスが大地が世界の不動の中心に非ることを說いて、常識に一大打撃を與へたると同時に、何故に大地は不動に見ゆるかを說明したのと同じようにマルクスの經濟學の領域に成し遂げたところも正に此ことを述べ、そして普通誰でもが、太陽は東から西へ空を沒するものと考へてゐるのはただ眼で見たまゝでは實際そう考へるのが自然であり、それが常識といふものであるか、このことが眞實であるならば、それに對して科學的研究を加へる必要はないだが往々にして兩者(科學と常識)が直接に一致してゐないが故に、そこに科學の必要が起る。だから科學はいつも常識を打破せんとするものであり、またそれゆゑに必ず常識から反撥される。俗人との闘爭は科學者の任務であり、かゝる對立物の闘爭によつてのみ人類の認識は發展すること等々論じられてゐる。吾々はこの書を目して現在吾々のもちうる最良の書——その中には幾多難解な意味か見えそして法士が誤つて考へられるのではないかと思はれる點もないではないが——であると信じ、これを各人に奬めるためのである。讀むと同時に現在住める社會は果して如何なるものかの認識に到達するであらう。この點に於て貴紙の鈴木光四郎氏の精神教育を主とせよとの所論は餘りにもたわいない氏一個の頭の中に於てのみ作り上げられた觀念以外の何物でもない。

「入門」の第二、第三分冊は既刊せらる。此等に對し私は何れかの機會に於て述べたいと思ふ。

＊明日　新八月　舊六月廿九日　吉凶＊

▲一白 定業さへ堅く守られば大なる支障はなし▲二黒 急速の發展はなけれども平和なる吉日たり▲三碧 他の力を頼まず自力を以て基礎を固むべし▲四緑 氣を走らせず心を落付け安思ふてよ▲五黄 住めば都、足も自由、思はずはげむが勝なり▲六白 そろ～良氣運に向ひ來るべし急ぐなかれ▲七赤 吉日なれど氣に緩み生じ易し注意すべし▲八白 和平專一とすれば卒福なる一日と成るべし▲九紫 飾りを戒め實利を患らとして奮勵すべし

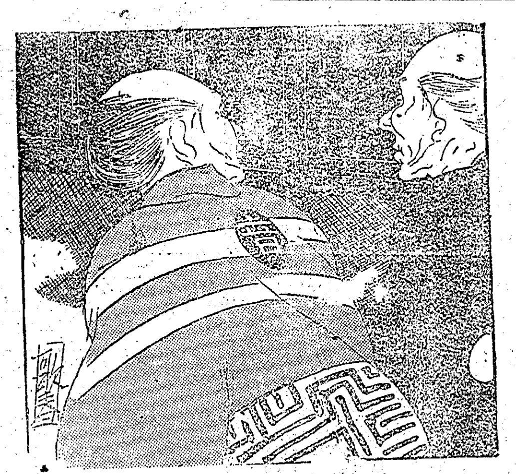
講談

幕末秘帖 狂怒乱心 (15)

渡邊默禪作　宮野歌春畫

「わッ、ぐわねん?」

と此方は驚いた



「部屋者でござるか、是は又た妙な者をお訪ねになりました」

「其の妙なものが居りまするかな」

「居るか什麼かは解りません、暫時それにお待ちください只今調べて見ます」

式臺に立揚つて左の方を向いて

「部屋頭ア!」

と大聲に呼んだ、仕切塀の彼方で

「おう!」

と返辭の聲が響く間もなく法被を着て白足袋に藤倉草履を突懸けた五十ぐらゐの男が駈出して來た

「何ぞ御用で?」

「頭、部屋中に梅といふ者が居るか」

「梅、梅……梅に何てえんで」

「何といふか解らん、苗字と名前を突くるめて、叩き潰したのが梅だ」

「はッはッは笑かてやがらア梅ッでお名の野郎が都合五疋ばかり居やアがるで」

「いよ～困つたなア、それは」

と若侍は苦笑をして

「實は頭、此の御方がお尋ねに相成つたのだ、所が只梅とばかりで詳しい名前がお解りにならん、それでお前に訊くのだが五人も居るとなつては探すにも骨が折れるといふものだ、モシ」

と平馬に向つてお聞及びの通りで御座る、人相や御用向等を承はつた上、いづれ此方で篤と取調べて置きまするで本日の所は一先づ御引取なされては如何なもので」

「いゝや左樣な譯には參らん、大切なる主用を帶びて態々出でながら本人不明なぞと申して空しく歸邸相成らうか、それこそ主人の面前に於て皺腹を掻切らんければならん何途切らねばならぬ腹なら失禮ながら當家玄關先を拜借いたして美事一文字に掻さばき申す」

平馬老人大氣焔を吐てゐる

「はッはッは、何だか知らねえが恐ろしく元氣のいゝお方だ」

と頭は笑つて

「可うがす、それぢやア兎に角部屋へお出なせえ、如何にか私が計つて上げやせう」

「さう、貴公が其者をお探し下さるか、それは千萬辱ない」と平馬は悦んだ

「それで解らなかつたら腹でも尻でも勝手に切るさ、さア此方へ來なせゑ、私たちのお館へ案内しるから」

平馬を先に藍唐草の暖布をかけた釣臺は除々と仕切塀の陰に這入つた其處には數丈の高さに築き上げた火見櫓があつて、下は砂を敷き詰めた廣庭、階子、龍吐水、刺又、玄番桶、長持などの消防器械が整然と列んでゐる。少し離れた所に一棟の大部屋是がぐわねんの起臥する寄宿舍だ。

十疊敷を三間も打透した廣間格子窓の方に巾一間許の細長い土間を切つてある ぐわえんは夜中火事装束の儘、此の土間の方へ足を向けて一列に寢る枕は敷間もある丸太その上へ手拭を充てゝ天窓を載せる。出火の際火見櫓の上から合圖の糸を曳いて鈴を鳴らす。同時にドンドン非常報知の太皷を槌つ。途端に宿直の不寢番が大槌を押上げて、析の丸太をトント叩く、夢の那裡のぐわえん逹ちは忽ち岸破と跳起きる、土間へ飛上りるより早く窓下に掛けてある鳶口を押取つて大部屋前の廣庭に整列する。是が彼逹の訓練されてゐる服務規律である。

一方は切窓の壁下釣棚に提灯や雜品が載つてゐる。其の下に三十人許のぐわねん、眞鍮の火鉢を圍んで數箇所に陣取りながら今し賭博の最中であつた。

スター好 中形
粋な 手中
着尺モスリン
本場カヤ
平 龜田屋 電五七

廣告

平町田町 高久病院 電話五一三番

中元贈答品
として必ず皆樣の御滿足を得る品は
◎タオル箱入 三本 五本
◎敷布箱入
◎沓下
◎縮シャツ
◎半布箱入
◎ツルヤノ特價石鹼
商品券の御利用は最も便利です
(に) ツルヤ

レコードハ此のマーク!を
HIS MASTER'S VOICE
肉聲のビクターレコード
販賣店 會田時計店 平町四丁目(電話三六三番)
店員募集

平町研町(公園下)
產婆 草野靜枝
電話(呼)四四三番

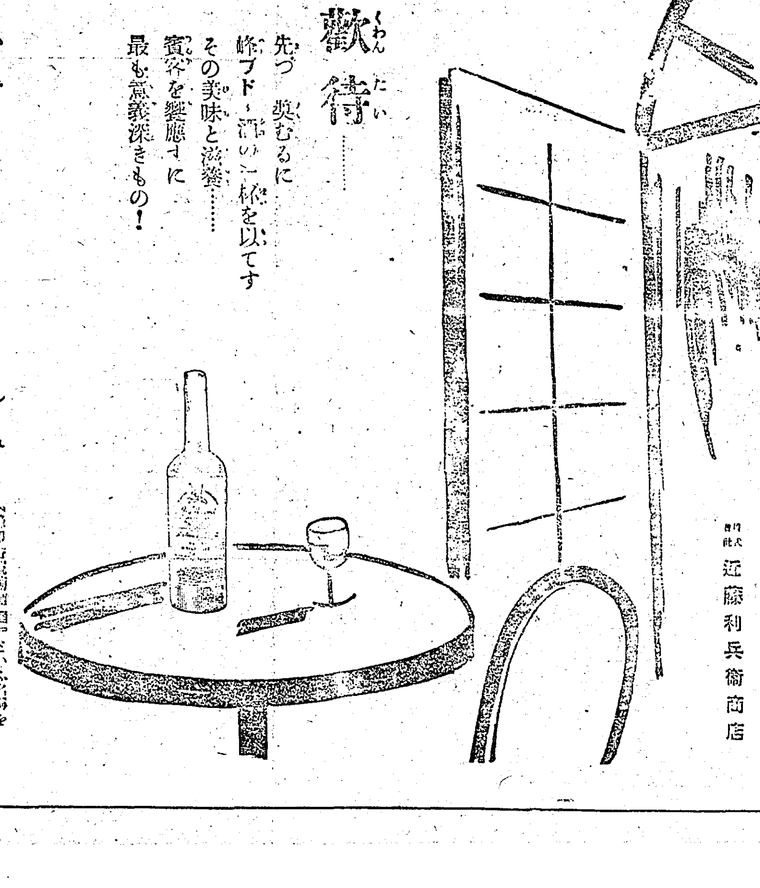
謹告
小生永々休業罷在候處今般左記ノ箇所ニ事務所ヲ設ケ從前通リ辯護士ノ業務ニ從事致候
辯護士 從五位 新妻誠一
事務所 石城郡平町搔槌小路一番地(田町通り) 電話一六一番

賣切御禮廣告
先般セイコー抽籤付腕時計賣出中の處御引立に預り全部賣切申候此の段御厚禮申述べ候
大谷時計病院 三丁目(電話一九番)
各位

診療開始
外科 花柳病科 專門
木村外科醫院
平町六丁目橋際(元〇久材木店跡) 電話三〇九番
入院自炊ノ便アリ

貸地廣告
平町郡役所より税務署附近の新開地に一千餘坪の貸地があります、然かも完全な土盛でありますから流失其の他の憂ひ絶對になく商店、諸工場並に高級の住宅地として最もの適地を極く安値にお貸しいたします
御希望の方は電話なり戴けば社員がお伺ひして親しく御相談に應じます
小名濱商事株式會社 平出張所 電話 六〇三番 五四一番

生花教授
池ノ坊流 生花を懇切叮寧に御教授いたします、お遊びがてら御出で下さい。
平町五丁目(釜屋横町)
須藤まつの


蜂ブドー酒
歡待……
先づ奬むるに
蜂ブドー酒の一杯を以てす
その美味と滋養……
賓客を饗應すに
最も意義深きもの!
『蜂印香竄葡萄酒』といふ名稱を貴店のお奬めに依り 且は時勢の推移に鑑み 今後『蜂ブドー酒』と改めます なほ市場にある從來のものは其儘として 御安心の上引續き御愛飲を願ひます
合資會社 近藤利兵衛商店

御中元御贈答には
使つて喜ばれ貰つて重寶な
◎◎◎商品券
三井呉服店

優秀なる最新型腕卷時計
◎クローム側 白金代用側
十型 十石入 アンクル 七圓五十錢
十型 十五石入上アンクル 拾壹圓
九型 十石入上アンクル 九圓五十錢
九型 十五石入上アンクル 拾三圓
八型 十五石入 アンクル 拾貳圓
八型 十五石極上アンクル 拾五圓
◎十八金側(金質保證)
十型 十石入上アンクル 拾貳圓五十錢
十型 十五石入上アンクル 拾八圓五十錢
九型 十五石入上アンクル 拾五圓
八型 十五石入上ヤンクル 拾七圓
平町五丁目(釜屋商店前)
鐵道省御用 金光堂時計店 電話七三六番

醸造元 清世界 (吉) 清水屋
石城小名濱町 小野晉平 電話六番
銘酒
各炭鑛御用達

家傳來の日本刀を振って 妻子を斬り殺す
二人は即死三人は瀕死の重傷 今曉平窪村の慘劇

平窪村大字中平窪字大儘農小野高義(三二)は今曉午前三時五分頃突如家寶の及渡二尺八寸の大刀を振り翳し自宅奥四疊半に熟睡してゐた妻キク(三〇)の左側頸部に斬り付け更らに長男喜平(十)次男助秋(二)長女ユキ(五)の三名を無慘にも

滅多斬り に斬り付け各れも瀕死の重傷を負つて悶絶するや妻キクと長男喜平の間に狹さり血潮の垂ゝ大刀を以つて已が衣類の上から横一文字に割腹自殺を計つたが死に切れず更らに咽喉部數ヶ所を突いたが死に至らず苦悶を續けてゐるのを午前六時に至り平素早起きの**高義一家**の戸が開かないのに不審を抱いた隱居所の高義の實母トメが發見大騒となり平署に急報すると共に有馬醫師外一名の醫師を招いで應急手當を加へたが被害者妻キク、長女ユキの二名は出血甚だしく遂に死亡し長男喜平、次男助秋及加害者高義の三名は各れも瀕死の重傷であるが、急報に接した平署から伊藤司法主任青田刑事部長以下刑事連は現場に急行

兇行の原因 其の他に就いて精細な取調を開始し更らに平檢事局武田檢事の一行も現場に急行取調を開始したが一家鏖殺の兇行原因は加害者高義の發作的兇行ではないかと言はれてゐる

常に死を口にした 加害者の素性
村でも中流以上の農家 發作的精神異狀

別項—一家四名の妻子を斬り妻キク、長女ユキ兩名を慘死長男喜平、二男助秋の兩名に瀕死の重傷を負はせ自分も割腹自殺を企した高義の兇行原因に就いては其の後平署青田部長以下の刑事連が活動中であるが調査の結果加害者高義は今春三月頃から幾分精神に異狀を呈し常に自殺するんだと口走り去月中の如き日光華嚴の瀧で自殺するとの一書を殘し漂然家出したのを家人が連れもどつた事もあるが精神に異狀を呈した後も高義は頗る溫順で家族等も安心し切つてゐたので兇行の前夜たる昨十二日夜も平素の如く居室四疊半に妻キク始め一同と午後九時半頃就寢したもので家計の如きも同村中での上流の部に屬する豐かな狀態で兇行の原因は高義の發作的に依る狂暴性から此の慘劇を生んだものであると判明した

危ないからさ 高義の懺悔 生命は助かる

兇行後の加害者高義は自刄の爲め瀕死の重傷を負び長男喜平次男助秋の兩子と共に自宅奥座敷に移され有馬醫師等の加療を受けてゐるが高義は生命を取り止むるべく喜平、助秋の兩子は兇行後發見されたまゝの出血が甚だしかつた爲め生命は危篤である比較的意識の確實な喜平は苦痛を怨へて兇行現場たる四疊半の寢室は文字通り血潮の海を現出隣室との堺唐紙白壁等は奔血染まつて凄慘其の極に達してゐる尙最初に發見した高義の實母は餘りの慘劇に驗倒しながらも兇行の原因に就いて高義に向ひ『何故に前は此んな事をしたんだ』と問ふた所高義は『アブナイから此處に仕舞つておいた』と言ひながら不自由な手を動かし自分の寢てゐる布團の下から及渡り二尺八寸の鮮血に染んだ兇刀を取り出して實母に見せてゐたと

石城 名所めぐり（十）
戊辰當時を偲ぶに足る 小名濱鹿島方面

△樋口館址

豐間村にあり岩城四郎細記に豐間能登樋口玄蕃といひ、里老の說には樋口次郎此處にゐると、今尙は石垣存す、館の東崎平坦なる所を鐘撞とし、其の南を表門とし其の北を裏門とす、東南一面の平地を稷岡と言ひ四方二町程の地を馬場先といふ

△小屋の山

鹿島村大字三澤にあり、昔安部貞任ノ病に罹りし時小屋を此處に造りその母來りて之を看護せし所にしてその附近に鍋塚と稱する貞任が病癒いて去るに臨み鍋を埋めし所なりといふ、今牛蒡迫といふ地には貞任の墓碑と稱する一石立てり、風林雨蝕幾多の霜星を經碑面苔蒸して文字判明せず

△七本松

鹿島村大字走熊の南端藏持に出でんとす、所老松數株あり、亭々雲に聳え颯々千古の遺韻を止む、昔田村將軍東征の折植ゑる所なりといふ、七本松の地名は蓋し此に因す、雨山左右より相依りて凹字形をなし、小名濱、江名の兩街道を扼して要害の地を占む、されば戊辰の役には東軍此處に壘を築き官軍を拒ぎ激戰せし處にして今尙は彈痕多く樹幹に殘り人をして當時を見る思ひあらしむ

△里屋橋

鹿島村藏持にあり、七本松より少しく南に當り小名濱街道に在り傳へ云ふ、昔久保村より欅の巨材を伐り出して橋を架せんとせし上、其の木重くして人夫大勢にて引けども押せども動かざりしを里といふ女の歌によりて難なく運搬するを得たり、依てその名に因みて里屋橋と名けたりとぞ、今は些細なる土橋にして殊更に注意を拂ふに非ざれば氣附かずして打過ぎる者多し、蓋し古藏持川は此の橋の所を流れたりしを後改修して他に移し橋も亦た隨つて小さくなりしものならん

△小名濱御陣屋址

小名濱町字古湊背後の丘上、御陣屋と稱する所は即ちその舊址なりといふ、延享四年內藤備後守國替の後を城付となし、殘りを幕府に收めて代官所の支配となし陣屋を此の所に設けて之れを治む後寛延三年に至り其の內より神谷の地を常州笠間の城主牧野氏に割く、而して代官所を此地に置きてより百二十二年二十一代慶應四年七月、戊辰の役となり幕兵三つ橋に大敗するや陣屋に火を放ちて平城方面に退却し一は中の作港より海路によりて遁逃す、茲に於て官軍は一旦泉方面に兵を收め進むで小名濱町に入り勝に乘じて中之作軍治山より平口に進み、平藩兵と大いに戰ひしが利あらずして退く。七月十三日再び三軍を勸して三軍となし、一は湯本街道より一は軍治山方面より一は中の作方面より藤間に出でゝ四倉方面の防禦軍に破りつて三軍等しく平城に迫り七月十三日總攻擊して遂ひに平城拔く官に御陣屋は戊辰當時を偲ぶ大本營であつた。

石城郡下で 惡疫流行
當局躍起豫防

石城郡地方は傳染病が非常に猖獗を極め警察當局は町村役場と連絡をとり極力豫防をなしつゝあるが毎日のやうに細雨がふり續いてゐるので完全な消毒をなすことが出來ず、今後ますます蔓延の徵があるので平署管內十一日の傳染病發生は疫痢好間村坑夫正二長男正吉(四)平町材木町酒商仁三郎次男江尻義孝(四)の兩名チブスは上小川村大工職勝政吉、難日出山金五郎(五)ジフテリアが豐間村薄磯漁夫駒吉三女鈴木トミ(四)で都合四名の患者あり平町附近は惡疫の流行で少からず脅かされてゐる

鮫川疏水も漁港も 前途極めて有望
鈴木、野崎縣議等も共に 內務部長視察談

石城郡地方を視察中であつた伊藤內務部長は十一日午後列車にて歸福したが視察の感想を叩けば

小名濱をはじめ四つ倉、江名、豐間の各港、鮫川疏水又び勿來等を視察して來たが石城は概して人氣が活潑で美人も多い小名濱港は流石に立派な港で前途すこぶる有望で江名四つ倉漁港も考究すべき必要があり鮫川疏水はもと巨額の費用を投じたに拘らず工事失敗し見るも無慘な有樣で目下無利子を以つて二千圓づゝ償却してゐるのだが鮫川電氣と同時にその復活問題を解決したくその必要を感じたと

鈴木縣議語る

縣會議員鈴木辰三郎、野崎滿藏兩氏は前項內務部長の郡下視察に加はり各所を隅なく調査する處あつたが鈴木縣議は語る

四倉を振り出しに豐間、江名、小名の各港並に鮫川疏水の水源地たる入遠野村御齋所峠の方まで踏査したが內務部長も吾々地元民の熱心に動き誠意を以て出來る限り地元民の希望に副ふべく努力する事と信ずる野崎君も極めて熱心に始終されたる事は地方民の期待に及かざる所以のもので實に尊敬に價すべきものがある云々

野崎君ご共に 熱心に踏査

平局舍着工
九月下旬頃に

平町郵便局新築局舍敷地々質檢查は漸くこの程終了していよいよ本設計も近く完成することになつたので九月下旬頃には着工の見込みである

明後日邊りから 復た暴風雨
きのうは本年第一の酷暑 小名濱測候所發表

石城郡地方が土用に入つて以來最初の快晴を見た昨十二日は鶴首して待つてゐた河童連で小名濱、四倉等の海水浴場は今年第一の入出で賑はつたが小名濱測候所の發表に依ると

昨十二日正午の氣溫は八十八度で今夏第一の酷暑であり十三日は七十七度昨日と引續いて快晴にか此れは小笠原に停滯してゐた低氣壓が異動した結果であるが目下流球方面にある七百三十三ミリの颱風が北進し始めたから明後日あたりは當地方を通過するものと觀測されまたまた颱風の襲來を受くる模樣である

伊藤氏着任
直ちに會議に 平署の特高

特高課新設に伴ふ警察官異動は既報の如く發表されたが平署特高課主任に榮轉した警部補伊藤榮次氏は今十三日午後四時平着列車で須賀川署から赴任直ちに北海道に開催される特高會議に參列する筈である向平署內勤巡查から部長に榮進縣高等課勤務に榮轉した持舘義雄氏は明後十五日午前九時二十一分平驛發列車で赴任すると

蠶業取締支所を 引張りの運動
益々斯界の發展を計る 石城郡町村長會

石城郡內の養蠶業は逐年盛んになり今後磐城組合製糸場の設置と共に更に發達を見るであらうがこれが指導機關たる蠶業取締支所の設置がなく漸く發達の緒についた養蠶業もために振興を阻害さるる憾みがあるので平町村長支會は昨年來平町に同支所設置の運動を起し十日來平した伊藤內務部長に對しても縷々その設置の必要を具申したが更に二十四日の臨時町村長會に同案を提出して猛烈なる運動をなす筈

低利資金の 事業視察
上野課長來平

大藏省の上野運用課長は屬官二名を伴ひ昨十二日來平本郡下に於ける同省預金部より負債ある平町水道部、江名信用組合、江名、小名兩町漁業組合、小名濱住宅組合等の事業狀態及償還方針等に就いて今十三日午前九時から平町商業校跡に前記關係官署を招致檢查の上本日歸京した

白米騰る
平米穀商で決議

平町の米穀商では十一日から左の如く白米の値上げをなした

△上等白米三十五錢△中白米三十四錢△並白米三十三錢△田糯四十三錢△陸糯四十錢△搗麥二十一錢

平局入所試驗

仙臺遞信局講習所入所試驗は來る九月一、二、三の三日間平郵便局に於いて執行する

番下の藥師を 金畑に還御
植田有志奔走

石城郡植田町番下藥師堂に併置してある藥師如來は以前同町字金畑町にあつたものが同町小學校建設敷地となつた爲め明治二十八年番下に移したけれども同町有志相謀り今回工費五百餘圓を投し以前の金畑町に還御する事となり左の委員が工費一切の準備に奔走中である、因に同藥師如來は寶永年間のもので靈現顯かなるのであると委員氏名左の如し

渡邊德之助、鈴木菊松、木村金兵衛、櫛田仁市、鳴澤要吉、小川傳助、森三藏　以上

石城町村長會議
御大典記念事業其他 舊郡衙に開會

町村長會石城支會では既報の如く明十四日午前九時半から舊郡役所跡に於いて臨時總會を開催するが當日の議題は

△御大典の奉祝方針（郡下全小學校及官私立各校等の旗及提灯行列を始め各種の奉祝）

△御大典記念事業（町村長支會の記念事業として石城統計協會設立及石城郡下全町村の自治制施行前より今日に至るまでの凡ゆる參考品、關係書類沿革史等を網羅して平町に自治典覽會を開催其の出品點數は各町村各れも十點以上とし開催日時其の他の協議及郡下全町村の各個に依る記念事業の打合せ）

△町村事務指導講習の受講方法其の他　以上

自動車谷へ轉落
平、小川間乘合車が 運轉助手負傷す

平町南町芹澤自動車商會所有平、小川間乘合自動車運轉手技利治(三二)が操縦し十二日午前八時三十分ころ乘客十名を乘せ小川からの歸途平窪村御殿地內に差掛かつた際豪雨の爲に地盤がゆるんでゐた爲か突如道路が崩落し自動車は二丈餘の斷崖から眞逆さまに墜落自動車は大破し運轉手技及び助手井上敏松(一九)の兩名が擦過傷を負つたのみで乘客には死傷なかつた

社會事業視察
水谷課長が來平

本縣水谷社會課長は十二日夜來平今十三日は早朝から平町自營會を始め石城訓盲院平町職業紹介所、石城共濟方部委員其他各種の社會事業內容を視察十三日午後三時平驛發列車で歸廳した

蓮沼氏小患

本社副社長蓮沼龍輔氏は急性胃腸カタルを起し十一日夜來自宅に加療中であるが今明日中に全快の見込み

小名濱講堂に 納涼音樂會
出演の諸氏名

小名濱町小學校講堂に於て十四日午後七時から納涼音樂會を開催する事となつたが出演者は左の如し

（琴曲）松本社中松本佐喜世、唐土みえ子、酒井ちい子、新妻社中新妻佐喜枝、木田松子、村上マツ子、永木テル（鹿風會）小山田吉次、高橋元二郎（獨唱）平陽女學校藤田春子、花澤けい子、內海鈴子（童謠）好間小學校鈴木いね、金成さま（洋樂）イワキ和洋音樂協會幹部數名明石氏指揮で出演する和樂松風外四　以上

平校增築入札
十三日午前執行

平第一、第二兩小學校の校舍一棟增築工事の競爭入札は今十三日午前十一時平町役場に於いて執行したが入札者廿數名であつた

清野氏長逝
葬儀は十四日執行

平町南町平產婆看護婦學校々主清野儀重氏は病氣加療中の處十一日午後八時逝去した、葬儀は十四日午後三時自宅出棺長橋町性源寺に於て執行の筈であると特種學校を設立し今日に至るまで幾多社會的貢獻多く享年四十九才長逝を惜まれてゐる

清野氏の 美學
消防組へ百圓寄附

平町看護婦會長清野キヨ子女史は此程物故した夫君儀重氏の遺志に基き金百圓を平消防組に寄附した

時言

伊藤內務部長石城を見て何れも立派だ前途有望であると、褒めるだけには金は要るまい、如才のない御世辭だ

□

家重代の名刀を揮つて妻子四人を斬つた精神病者がある、是れをこそ紛れもない氣狂に刄物と謂ふ

□

蠶業取締支所の奪取運動いよいよ猛烈となつた、奪れねば男の面目に係る、石城町村會覺悟はよいか

□

氣狂ひ天候また明後日から颱風に化けるそうだ、ママヨどうせの序でだ舊冬一ぱい降つて見やアーがれ

夫儀重儀永々病氣中の處十一日午後八時死去仕り候此段辱知各位に謹告仕り候

追而葬儀は十四日午後三時自宅出棺長橋町性源寺に於て執行仕る可く候

八月十一日

喪主　清野キヨ
酒井重雄
親戚總代　酒井秀次郎
宍戸宇市
佐藤長久
友人總代　猪狩清
鈴木辰三郎
大森勇

本校々主清野儀重儀病氣中の處十一日午後八時死去仕り候此段謹告仕り候

私立平產婆看護婦學校

本校々主清野儀重儀病氣中の處十一日午後八時死去仕り候此段謹告仕り候

私立平產婆看護婦學校同窓會